

## 国語

(時間 五十分)

受験番号

## 【注意事項】

- 1、試験開始の合図があるまで、問題冊子の中を開いて見えてはいけません。
- 2、指示があったら、解答用紙を問題冊子から取り出し、解答用紙の決められた欄に配られたシールをはりなさい。はり終わったら、解答用紙をすみやかに問題冊子の中に戻しなさい。
- 3、試験開始の後、受験番号を問題冊子・解答用紙の決められた欄に、氏名を解答用紙の決められた欄に、それぞれ記入しなさい。
- 4、問題文には、原文(原作)の一部を省略したり、文字づかいや送りがないを改めたりしたところがあります。
- 5、答えは解答用紙の決められた箇所かしょに記入しなさい。
- 6、問題は十六ページあります。問題が抜けている場合、印刷がはっきりしない場合は申し出なさい。
- 7、何か用事ができたときは、だまって手をあげなさい。ただし問題の内容についての質問をしてはいけません。
- 8、試験終了の合図あひびがあったら答えを書き続けてはいけません。すぐに筆記用具を置いて解答用紙の回収を待ちなさい。
- 9、問題冊子は持ち帰ってかまいません。

一 次の——線部①～⑧のカタカナの部分、⑨・⑩の漢字の部分、をひらがなで書きなさい。

いずれも一画一画をていねいに書くこと。

総理大臣はカクギを開き、今後の対応について話し合った。

新しい試みをするのがゼンエイ芸術だ。

③ フカをかけたトレーニングによって記録向上を目指す。

④ 国のカイクを進めて将来を明るいものになりたい。

⑤ テツボウで逆上がりの練習をする。

⑥ トウセイのとれた隊列に舌を巻く。

⑦ 宝石を五つのトウキュウに分けて価格を調整した。

⑧ キョウゴウする企業を買収し一つの組織にした。

⑨ 己の後ろすがたを鏡に映して見たことがありますか。

⑩ あなたはその危うさに気づかないのですか。

二 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

看護師の南玲子（ななれいこ）はリハビリテーション専門病院に勤務している。その病院に中学三年生の野呂悠馬（のろゆうま）が、脳出血の治療を受けた病院から転院してきた。主治医の小塚太一（こづかたいいち）、理学療法士（足のリハビリを受け持つ）の黒木さおり、作業療法士（手のリハビリを受け持つ）の深沢朱理（ふかざわあかり）と玲子の四人が悠馬の担当になったが、体調がすぐれず休みがちな朱理の代わりに、新しくこの病院にやって来た経験豊富な作業療法士の大迫まひろ（おおせまひろ）が務めることが多くなっていた。

「南さん、あなた、野呂悠馬さんの担当よね？」

まひろの圧力に戸惑いながらも、玲子はなんとか頷きながら答えた。

「ええ。そうですけど。」

「なんで、利き手交換やっているの？」

「利き手交換？」

昼休み明けは、その日に勤務している看護師全員でカンファレンスを行う時間なので、玲子以外のみんなは円卓に座って、カルテを開いたり、自分用のメモ帖を開いて午後の業務内容を確認したりしながら、その開始に備えていた。彼女たちには部屋の離れたところで話す玲子とまひろの会話は、おおよそは聞こえてはいるはずで、いずれにしても玲子が戻ってこないカンファレンスが始められないので、なんとなく見守られているような感じだったが、まひろはそのようなことを気にする素振りも見せず、整った眉をひそめて、小さくため息をついた。

「左で字を書く練習をしているんですしよ？」

「あ、はい。ええ。それが何か問題でも？」

「誰の許可でそんなことしているの？」

許可？ 病棟で字を書く練習をするのに、許可が必要なのか。玲子は初めて言われることに最初はただ戸惑っていたが、その言葉を反芻（はんそう）しているうちに、自分の中におよそ仕事中には相応しくない感情が込み上げてきて、幾分大きな声で答えた。

① 「朱理、深沢さんとは相談しました。それ以外に誰かの許可が必要ですか？」

まひろは、小さく一つ頷いて、それでも表情は変えなかった。

「深沢さんと話しているのね。なら、まだいいけど。」

自分の大きく冷たい鼓動が頬を赤く火照らせているのがわかった。その相反する不思議な感覚の中で、玲子が忘れかけていた呼吸を一つついたら時、まひろは口を開いた。

「これからは私に言ってもらえますか？ リハビリのやり方に関わることなので。深沢さんは、ご存じの通り、今、休みがちなので、私の方が野呂さんの状態を把握していますし。こういう行き違いがあるといけないから、今日から正式に担当を変えることにします。今後はよろしくお願いします。」

注1 カンファレンス＝打ち合わせ。

注2 反芻＝心の中でくりかえすこと。

そう言って、まひろが立ち去ろうとしたのを玲子は思わず呼び止めた。

「え、ちょっと待ってください。朱理と話もせずに、担当変えるんですか？」

「今でもほとんど私がやっているし、実質的には変わらないですよ」

まひろは、玲子に呼び止められたことに少し驚いたようだったが、それだけ言い残して、今度こそ部屋を出ようと振り返った。その手を玲子が掴んだのは、悠馬のリハビリのことで思い悩む朱理の表情が思い浮かんだからだった。

「朱理の、深沢さんの話を聞いてからにしてください。彼女は一生懸命、悠馬君のことを考えているのに、突然、担当外されたら可哀想じゃないですか」

玲子を見るまひろの目は、ナースステーションに入ってきた当初と違って怒っていなかった。むしろ、先ほどまでは過剰なまでの圧力を纏っていたまひろの視線が、もうその役割を終えたかのように、ただ本来の、玲子を見るだけのそれに変わっていた。

「一生懸命考えるのは当たり前でしょ。私からしたら、可哀想なのは彼女じゃなくて、野呂さんです」  
もはや一向に戻ってこない玲子に **A** を切らして、向こうではカンファレンスが始まっていた。早く戻らないといけないとわかつてはいたが、<sup>③</sup> そうするにはまひろの言葉は玲子にとって衝撃的過ぎた。問い返すことすらできずに、玲子は続けざまに浴びせられるまひろの言葉を聞くだけだった。

「どうして、あなたたちは左手の練習を始めたの？ 野呂さんの右手は今どのような状態だかわかっている？」

まひろは、玲子を一瞥して言葉を続けた。

「筋活動が始めていることすら判断もできないなら黙っていて。あと、あなたたちの仲良しごっこに患者さんを巻き込まないで」

玲子には、もうまひろを引き留めることはできなかった。

数日が経過。その間にまひろは太一に悠馬の治療方針を説明し、了解をとった。

その日、玲子は準夜勤だった。夜八時を過ぎると、医師や療法士も徐々に病棟から姿を見かけなくなっていく、病棟で働いているのは玲子を含めた看護師のみになる。ほとんどの患者さんも自分の病室に戻るので廊下は閑散とし始めていた。

玲子は、いつものように患者さんの寝る前の身支度や、薬を配る業務に追われていた。日勤帯よりも少ない看護師で行うので準夜勤は忙しくて、余計なことを考えている暇はなかった。けど、ふと立ち止まると、何とも言えない心の重さを自覚して、普段ならすぐに動き出せるところでも、足が前に出ないような感覚があった。そして、それは久しぶりのように思った。

仕事を楽しめないということではないにせよ、そういった類の感情に悩まされることは最近少なくなっていたのだと、玲子は改めて気づいた。自分の周りには、太一や朱理、さおり、城咲たちがいて、何か問題があっても一人で抱えないといけないことは減っていたのだ。

「一人分やれば十分」

かつて太一に言われた言葉は、今も玲子の心の引き出しの中にあつた。自分は看護師として、そのチームの中に居場所を確保していたと思っていた。逆に言えば、自分はその人たちに支えられて働いてきたのだ。

「朱理、大丈夫かな」

自分だけのことだったら、玲子はきつともつとまひろの言うことを受け入れられたのだと思う。玲子自身は、まひろのように強くないし、事実、これまでいろんな人の言葉に影響されてきたのだから。しかし、玲子が今回なぜこんなにまひろに拒否反応を起こしているのかと考えれば、自分ではなく、仲間を否定されたからだ。それは玲子にとって、自分のことを否定されるよりもずっと看過できないことだった。

玲子がカルテを書くためにナースステーションに戻ると、そこにはまひろがいた。一瞬たじろいだ玲子を尻目に、まひろは悠馬のカルテを熱心に読んでいた。カルテを書いている玲子とカルテに目を落としているまひろ。同じ空間にいる二人が言葉を交わしたのは、まひろが悠馬のカルテを閉じ、ラックに戻した時だった。

「夜勤、お疲れ様です」

「大迫さんこそ、遅くまで大変ですね」

「いえ、会議とかがあると、患者さんの情報を取れるのがこの時間になってしまつて」

玲子は何かをまひろに伝えたいと思っていたが、いざこうして彼女を目の前にすると、自分の意気地のなさだけがむくむくと顔をもたげてきて、何も言えなかった。仕方なく次の患者さんのカルテを書くとした時に、もう一度まひろが口を開いた。

<sup>④</sup> 「この前はすみませんでした。言い過ぎました。正確には、ちゃんと伝えるためには不適切な言い方でした」

「いや、そんなこと」

「いえ、同じ作業療法士である私と深沢さんの間ですら、治療に対する考え方の違いがあるのだから、ましてや職種の違いで南さんに、理解を求めるのは間違っていました」

まひろの淡々とした、しかし反論の余地のない物言いに、玲子はやはり聞くしかなかった。

「リハビリには、いろんな目標があります。もちろん、早く社会復帰させることは目標の一つです」

まひろから、この前話した時ほどの威圧感も、自分に対する「見切り」のようなものも感じられなかったのだ。玲子は少し不思議な気持ちになっていた。

「ごめんなさい。あなたの野呂さんのカルテを見て、南さんが本当に彼を早く学校生活に戻したいんだということがわかりました。だから、ちゃんと説明すべきだと考え直したんです」

玲子は、目の前のまひろから、なんだか懐かしい雰囲気を感じていた。しかし、それがどうしてなのか、まだ全くわかっていなかった。

「でも、私は、やはり南さんや深沢さんのやり方は間違っていると思います。ご飯を食べる、字を書く、着替えをする。もちろん、左手でもできるようにはなるでしょう。その方が早いし、現実的かもしれ

注3 「瞥」ひと目ちらつと見ること。

注4 城咲く病院のスタッフの一人。

注5 看過できない見越せせない。

れない。でも、それがリハビリだとは、治療だとは、私は思いません。彼の右手を、極限までよくするのが私の仕事です。それが最も優先されるべきだと思います」

「それはわかります。でも、それが難しい場合は、健側の練習をするしか仕方ないし、それもリハビリじゃないんですか？」

⑤ 朱理とまひろのスタンスの違いは、こうして言葉にしてしまえば明確だった。患者さんを、野呂悠馬を良くしたいという気持ちは一緒なのに、何を良くするかが違うのだ。

「そのプロは私なので、私に判断させてください」

その言葉に冷静に反応できるほど、玲子の考えは成熟していなかった。自分がこれまで、自分なりに全力で取り組んできたやり方を、そう簡単に覆されるわけにはいかないと思っていた。それは玲子だけの問題ではないのだ。太一や、さおりや、そして何より、今は悠馬のリハビリを自分の手ではできない朱理のことを考えたら、ここだけは引き下がってはいけないと思えてくるのだった。

「それは、違うと思います。それはみんなで話し合って、最後には小塚先生が判断することだと思います」

「小塚先生とは話しました。多分、ご納得されていると思います。少なくとも、野呂さんに関してのことは」

その言葉は、玲子にとっては何より重かった。そして、まひろがそのように思っていないであろうことが、ますます玲子の勝ち目のなさを物語っていた。

まひろが立ち去った後、玲子は一層重くなった腰を上げて、ラウンドに向かった。病院の消灯時間は早い。蓮田市リハビリテーション病院のそれは二十一時だった。廊下も小さな非常灯だけが灯され、病室もメインの照明は消される。それでも、カーテンに仕切られた各々のベッドでは、スタンドライトを点けて起きている患者さんもいた。玲子たちは手分けして全ての患者さんのもとに出向き、その安全を確認すると、玲子は最後に悠馬の入院している個室に向かった。

ノックをしてから、そっと扉を開けると、病室の中はまだ明るかった。悠馬はベッドに腰掛けた状態でサイドテーブルに向かっていた。

「練習していたの？」

玲子の問いかけに、悠馬はなぜだか⑥ バツが悪そうに笑った。

「ごめんなさー」

「謝ることじゃ、ないよ」

悠馬の右手には柄の太いマジックが握られていて、テーブルの上には彼が書いた、まだ字とは言えないたくさんの線が残っていた。

「このくらの太さの物でなら書けるようになってきていて。細いのはまだ無理だけど」

「すごいじゃない。すごいよ」

悠馬のできることが増えていくことは、玲子にとって本当に嬉しいことだった。

「でも、そろそろ寝ないと」

悠馬は頷いて、マジックを置くと、左手で右手を揉み始めた。そして、その手をじっと見ながら、そっと話し始めた。

「こっちの手、使えないかもって思っていたけど、もしかしたら、できるかなって」

悠馬の表情は不安そうでもあり、前向きな希望に満ちているようでもあった。その二つの入り混じった空気が部屋の中に満ちていて、玲子はそれを強く感じられるように大きく息を吸い込んだ。

「大迫さん、怖いけど、大迫さんのリハビリ受けた後は手が動きそうな感じっていうのがわかるんです。あ、右手がもう少ししたら動くなって。それはすごく嬉しいことで。僕、まだ右手良くしたいんです。無理なら諦めるけど、でも、出来そうな感じ、あるんです」

そう言っただけになった悠馬の部屋の電気を消して、その部屋から出ると、暗い廊下を戻る自分がうっむき加減なのを玲子は自覚していた。

「あの人に負けた？」

悠馬の希望の言葉は、玲子を勇気づけながら玲子を買めているように思えてきて、でも、今、悠馬に希望を与えられているのはまひろだということは認めざるを得なかった。すると、あの最初の頃のまひろの厳しい口調が、否応なしに玲子の中に蘇った。

「筋活動が出始めていることすら判断もできないなら黙っていて」

太一に相談したい、と玲子は思ったが、小さく首を振った。すると、⑦ 今まで信じてきたものがなくなってしまうような心細さがこみ上げてきて、玲子は慌てて光の点るナースステーションに駆け込むと、一つ息を吐くのがあった。

(川上途行「ナースコール！ 戦う蓮田市リハビリ病院の涙と夜明け」による)

問一——線部①「朱理、深沢さん」とありますが、玲子がそう言ったのはなぜですか。その理由としても適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア まひろはこの病院に来て日が浅いので、「朱理」と名前では誰のことかわからないと思っただけから。

イ ふだんの習慣で「朱理」と名前と呼んでしまったが、仲間うちの言葉づかいでやりとりをする場面ではないことに気づいたから。

ウ この職場の習慣に従って「朱理」と名前と呼んだが、まひろはこの職場の習慣に従おうとしない人だったことを思い出したから。

エ 公私のけじめをしっかりとつけようとするまひろに反発して「朱理」と名前と呼んでみたが、さすがにそれはやりすぎだと思ったから。

注6 健側／半身に障害がある場合の、障害がない側の身体。

注7 ラウンド／見回り。

問二——線部②「大きく冷たい鼓動が頬を赤く火照らせている」とありますが、このときの玲子について

の説明としてもっとも適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 朱理を守るためにまひろに何か言えるのは自分しかいないという緊張から身体は熱くなっているが、そんな自分を観察する冷静さももっている。

イ まひろと対決してもお互いのためにならないと考えて問題を先送りにしようとするずるさがある一方で、そんな自分を許せない純粹さももっている。

ウ 朱理の方針を無視するまひろには冷静な反論を考える一方で、経験豊富な相手に対して緊張している上に、個人的な怒りの感情が自然と身体に現れてしまっている。

エ 心の中ではまひろを冷淡に切り捨てようとしているが、もともとは優しい性格なので冷淡になりきれず、朱理への配慮が足りないことへの怒りで身体は熱くなっている。

問三 A に入るひらがな三字の言葉を答えなさい。

問四——線部③「そうするにはまひろの言葉は玲子にとって衝撃的過ぎた」とありますが、その理由としてもっとも適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 悠馬の状態について予想もなかった見解をまひろが示したのに対し、その見解が正しいのだとしたら、悠馬の右手の機能を回復させることは絶望的だと思ったから。

イ 朱理が悠馬の担当から外されること自体を予想していなかったのに加え、そのことで朱理が受けるショックをまひろがまったく想像できていないことにあきれてしまったから。

ウ まひろのことはもともと快く思っていなかったが、カンファレンスに参加するより自分ともっと話すべきだというまひろの今回の態度は、あまりにも非常識でついていけなかったから。

エ 朱理を悠馬の担当から外すことを一方的に言われただけでもショックなのに加え、悠馬のためと思ってしてきたことが悠馬のためになっていないとは、考えてもみなかったことだから。

問五——線部④「この前はすみませんでした」とありますが、まひろが態度を変えた理由としてもっとも適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 玲子が看護師としてきちんと働いているのを知り、対等の同僚として方針の違いを説明すべきだったことに気づいたから。

イ 玲子が悠馬のリハビリには欠かせない存在であることに気づき、機嫌を損ねないようにしなくてはいけないと思ったから。

ウ 方針の違いは朱理と話し合うべきことだったのに、その段階を経ないで異なる職種の玲子に八つ当たりをしてしまったから。

エ 玲子がチームで支え合うことの大切さを重んじている人であることを理解し、自分もチームの一員だと認めてほしくなったから。

問六——線部⑤「朱理とまひろのスタンスの違い」とありますが、悠馬のリハビリで何を最優先と考えているか、朱理とまひろのそれぞれについて、十字以上十五字以内で「こと。」につながる形で答えなさい。

問七——線部⑥「バツが悪そうに」とありますが、悠馬がこのような理由を三十字以上四十字以内で答えなさい（句読点・記号も一字に数えます）。

問八——線部⑦「今まで信じてきたものがなくなってしまうような心細さ」とありますが、このときの玲子についての説明としてもっとも適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 太一に相談すれば、以前の助言が今度も返ってくるだろうが、太一の助言に従ったために自分の成長が止まったことに気づき、何をよりどころにしたらよいかわからなくなっている。

イ まひろは玲子に期待しているからこそ厳しくしていることに気づかず、まひろから浴びせられた言葉の激しさを気にするあまり、自分は職場で孤立無援の状態だと思こんでいる。

ウ 太一に相談すれば、太一はまひろの肩をもつだろうから、まひろとの関係の改善の見通しが立たない現状では、自分の味方になってくれる人が誰もいないことに気づきはじめている。

エ 自分よりもまひろのほうが太一の信頼を得ていることを認めざるをえなくなると、患者のためを思ってチームの中の役割を果たしてきた自分の存在意義が失われる不安を抱いている。

問九 本文についての説明としてもっとも適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 地の文（会話以外の文）では、玲子の習慣に従って登場人物を名前で呼んでいるのがほとんどだが、客観的な記述が求められる場面では、名字で呼んでいる箇所がいくつかある。

イ 太一と朱理が登場する場面はなく、玲子とまひろの会話のなかで語られるだけであり、二人の行動が語られた通りでないことは、注意深く読むとわかるようになっていく。

ウ 一人称（「わたし」など）の語り手が設定されているわけではないが、玲子が見聞きしたり感じたりしたことが書かれ、他の人物の発言や行動の記述は玲子の見聞きした範囲に限られている。

エ 語り手が誰であるかは明らかにされていないが、どの登場人物の心の中にも入り込める語り手として設定されていて、その結果どの登場人物が考えていることも読者に伝わるようになっていく。

次の文章は、人類学者であり、ゴリラの研究で知られている山極寿一氏の書いたものである。この文章を読んで、後の問いに答えなさい。

①ゴリラもチンパンジーも、いったん集団を離れた個体は、その集団に二度と戻ることができません。離れても数時間、あるいは数日ぐらいであればいいかもしれませんが、一週間、二週間離れてしまった個体は、その集団の中で死んだも同然という位置づけになります。つまり、ゴリラにとってもチンパンジーにとっても、集団の仲間であるという意識は、常に持続的に、視覚や聴覚でお互いの存在を認知し合っているということから生まれているわけです。ところが、人間はそこからだんだん離れていきました。ある程度会わなくても、仲間であるという認識を持つようになったのです。これによって、いったん集団を離れた仲間が再び集団に戻れるという特徴を身につけました。

この社会性を持ったことが、ゴリラやチンパンジーとは違った、人間の社会の発端だったのではないかと思います。

(中略)

きっかけは、人間が行動範囲を広げたこと、それによって集団が常にまとまって動くことができなくなったことです。チンパンジーは一つの集団が常にまとまっているわけではありませんが、行動域は限られています。しかし、人間は進化の過程で、ゴリラやチンパンジーが住み続けている熱帯雨林を離れ、行動域を広げざるをえませんでした。なぜそうなったかについては、まだわかっていないことが多いため、ここでは問いません。しかし、いずれにしても、私たちの祖先が熱帯雨林を離れたことは確かです。

その時、大きな壁にぶつかりました。一つは、森の外は食物が分散していて、集団が一つにまとまって動いていては、食料を賄いきれなかったということ。これによって、食料を分配するだけではなく、遠くまで探しに行つて採集し、仲間のもとに持つて戻つてきて、それから分配して一緒に食べるといふ行為が必要になりました。人間が食物を運搬するようになったことにより、それを待つている人間にとっては、仲間がどこか知らないところで採つて、持ち帰つた食料を食べるといふ行為が生まれまし。これは、自分ではなく、仲間が確かめて持つてきた食物を信じて、つまり仲間を信じて食べる行為です。

(中略)

これが人間の社会性の始まりだと思えます。そのときに、新たなコミュニケーションが芽生える必要が生まれました。それは、相手が見たことのない場所や、由来のわからない食物の安全性を説明する、あるいは、待つている人にとっては、自分が食べたいものを想像し、自分が見ていない場所で活動している仲間の姿を想像することです。これによって見えないものを想像する能力が生まれました。

③想像を共有することによって、人間は活動範囲を広げ、恐らく人間の社会的つながりに新しい変化をもたらしただと思えます。つまり、ある程度欠落した時間があつても、仲間として認めることができるような、そして、それを想像力によって埋め合わせるような社会になりました。これが最後には言葉に結びついていくコミュニケーションです。このようなコミュニケーションの発達共感力の増大によつてもたらされました。仲間は何をしているか、仲間が一体どういふ気持ちで自分のこ

とを見ているかということ想像し、仲間の気持ちを、心を読むという行為が必要になりました。

また、新たなコミュニケーションは、子育てを共同することによつても出現しました。ゴリラやチンパンジーは、熱帯雨林という安全な場所において、子供は小さく母親が軽々と運び歩くことができますし、子供の方も自力で母親に掴まる能力を持っていますから、少なくとも授乳期は母親一人で子供を育てることができます。一方で、人間の子供は非常にひ弱なまま生まれてきます。また、ゴリラの子供が一・六キログラムほどなのに対し、人間の赤ちゃんはその二倍ほどあります。

④なぜそんな状態で生まれてくるようになったのかというと、それはやはり人間がゴリラやチンパンジーと違って、肉食獣に襲われる可能性の高い、サバンナや草原に出てきたからです。森を出てすぐ、人間の乳幼児死亡率は高まったことでしょう。そのため、人口が激減しないために、たくさんの子供を産む必要が出てきました。

(中略)

人間の母親は毎年でも子供を産む能力を持っています。ところが、ゴリラもチンパンジーも四年か五年おきにしか子供を産めません。X それでも子供を早く離乳させたのは、やはり子供をたくさん産む必要があつたからだと思えます。

また、二〇〇万年前に脳が大きくなり始めたものの、すでに直立二足歩行が完成していたことにより骨盤の形が変化して、あまり産道を広げることができなくなっていました。ですから、なるべく小さな頭の子供を産み、難産を回避した上で、脳は生まれた後に急速に発達させるという方法が選ばれました。しかし、脳を胎児の速度で発達させるには多大な栄養が必要となります。そのため、栄養が不足しないよう、体に分厚い脂肪をまとわりつかせて生まれてくるようになりました。

この戦略により体が大きく重くなった結果、頭でっかちでひ弱な、成長の遅い子供がたくさん生まれることになりました。こうなると母親一人ではとても手が足りません。そこで、子供が離乳した母親や男たちが寄つてたかつて子供を集団で、つまり共同保育するようになりました。しかも、保育の対象である人間の子供は未熟でひ弱で、いろいろなケアが必要ですから、大人同士の間でも大人と子供の間でも、気持ちを的確に読んで行動する必要が出てきます。ここで、お互いに調整し合うために、どうふるまえばよいのかという、食物によつてもたらされたとは別の共感力が高まったのだと思えます。

この、共感力の増加によつて、ゴリラやチンパンジーにはない、離れた仲間思いを馳せ、見えない者に想像力を働かせることができるようになりました。さらに人間は道具を発達させました。石器が初めて登場するのは、二六〇万年前で、これは人間の脳が大きくなる少し前に当たります。道具は手の延長、足の延長、指の延長としての機能を持つものですから、道具があるだけでまだ起こっていない活動を想像することができます。そのことが、まだ見えていない世界をお互いが共有するという結果につなが

注1 授乳は母親が子供に母乳を与えること。「授乳期」はその期間。

注2 離乳は授乳期が終わり、子供が母親の母乳を飲まなくなることを指す。

注3 骨盤は腰やお尻を形作っている骨。

注4 胎児は母親のお腹の中(胎内)にいて、まだ出産されていない状態の子。

注5 ケアは世話。

りました。ですから、道具の出現もまた、人間に新たなコミュニケーション能力をもたらしたであろうと思います。

逆に言えば、道具から人間を見ることができるといことです。例えば、食物の量を増やしたり、食物の分配を変えたりすることによって人間関係が変わりますから、食物自体も道具として作用し、人間関係を調整する媒体となりえます。また、道具の使い方をあらかじめ予想し、あるいは道具が貸し借りして使われることによって、社会的な場面で人間関係を調整するきっかけにもなりえます。つまり、物を介して人と人がコミュニケーションできるようになる。それによって、新たな社会関係が始まります。

結果的に、人間の移動を頻繁にさせ、人間の集団自体を拡大させました。<sup>⑤</sup>人間の脳は、恐らく道具を使い始めてから大きくなりました。それが意味するのは、人間の活動範囲が増え、人間同士の関係が道具を介在させることによって、あるいは物を介在させることによってより複雑化したということです。これが人間の言葉の発生前に起こった現象で、これが言葉につながっていったのだと思います。そして、言葉ができたことによって、人間はさらに新たな領域に入りました。

言葉というのは、重さを持たないコミュニケーションの道具です。それまでは物を使ってしか、あるいはジェスチャーを使ってしかコミュニケーションできなかったものが、言葉という全く重さのない音声によって伝えられるようになったことは、非常に大きなことです。つまり、人間は時間と空間というものを、言葉によって自由自在に操ることができるようになったわけでは

この世界は言葉によって始まった、言葉は神であったと聖書に記されたように、言葉をしゃべり始めた人間の前に、全く新しい地平が開かれました。つまり、現実のものよりも、言葉を信じるようになったわけでは、初めのうちは、言葉の真実を目で見て確かめるということに伴っていったと思います。つまり、視覚や聴覚よりも言葉が主力になっていったということです。

人間はサルや類人猿と共通の祖先を持っていますから、サルや類人猿のような五感を使って、つまり視覚優位で真実を把握するようにできています。まずは視覚、次に聴覚、ところが嗅覚、味覚、触覚は個人的な感覚で、他者とはなかなか共有できません。しかし、言葉が視覚と聴覚を乗っ取り、見える世界、聞こえる世界を言葉によって人間は共有できるようになりました。

言葉がない時代、人間は言葉を持たないいろいろな生物と感応することが、簡単に言えば、会話することができました。鳥の声を聞いて鳥の気分がわかり、他の動物の声を聞いて、あるいは他の動物の姿を一瞬でも見るだけで、その動物が何をしようとしているかを直観で理解しながら、その動物たちと共存できるようにふるまうことが、人間にはできていました。そこでは、人間と他の動物は対等でした。ところが、人間にとっては言葉によってつくられる世界の方がよりリアリティを持ってしまい、人間は次第にそちらの方を信じるようになりました。それが神の言葉です。

神の言葉は最初に、お前たちにこの世界を管理する権利を与える、しかしその代わりに収穫物の一部

注6 媒体に仲立ちをするもの。

注7 介在に間に置くこと。

をよこせですとか、そういうことを言っています。そして契約をするわけです。その契約はまさに、言葉によってつくられた世界を人間に与えるもの、すなわち、人間は言葉を持つことによって、この世界の主人公に、もはや動物と対等ではないものになったということです。<sup>⑦</sup>ここから人間独自の世界観や環境観が始まります。家畜が生まれ、栽培植物が生まれて、人間は食料を生産するようになりました。そして、それが人間の活動自体を定めるようになります。

一番大きなことは未来を予測するようになったことです。時空を飛び越えて、先のことを予想することができるようになりました。また、過去の事実も言葉によって伝えられますから、本当に起こったかどうかなんて、誰にもわかりません。私はそれが宗教の出発点だと思っています。ですから、言葉が最初にある、それはまさに宗教の真実だと思っています。

人間は、サルや類人猿とも共通に持ち、祖先から受け継いだ五感を言葉に預けてしまったということです。それはロゴス、すなわち論理の世界ですが、しかし、人間は未だにロゴスからこぼれ落ちたものをたくさん持っています。しかも、それによって人間のビビッドな生命観がつけられています。例えば愛情、これは言葉になりません。好き、愛していると言っても、それは気持ちを端的に表しただけではあつて、一体好きとは何なのか、愛とはどういうものなのかということ、全部説明できるわけではありません。それは、会って、手で触れて、嗅ぎ合って、同じものを食べて、同じものを見て、という身体的な接触の中で紡ぎだされるもので、そうやってお互いの一体感を築きむということ、人間は未だにやっているわけです。

ところが今、人間は言葉を離れ、情報をやり取りし始めました。それによって、言葉がどんどん安っぽいものになってきています。私がゴリラと付き合っていて感じたのは、言葉というものはそもそもすごく安っぽいもので、だから、本当は信用できないコミュニケーションなのではないか、ということでは

言葉は情景を描いたり、物事を伝えるということに関しては、非常に便利で効率的なものです。しかし、我々が五感で感じた風景や音声を言葉にして伝える場合、それは非常に抽象化したシンボルにつくり変えられています。ですから、自分が感じた風景や音そのものは、本当には伝えられないのです。それが文字になると、さらに抽象的になります。言葉で伝えているうちはまだ個性が伴っていても、文字で書かれた文章は化石化した言葉となつて、具象化して復元する際に様々な付属物がつきます。具象化の過程で、受け取る側の思いが入り、伝える側の思いとは全く別のものが広がってしまうわけです。それが今の時代に、さらに加速しています。

例えば、今は映像を情報化して流すことができます。しかし、映像は言葉と同じように、そこに詰まっている情報を、見る側が見る側の思いで加工修正して広がっていきます。ですから、情報通信機器が発達すればするほど、情報が氾濫し、それによって情報が信じられなくなつてきています。例えば、政治家が言ったことがすぐ話題になつて、非難されたりしていますが、本当はそんな意味のことを言ったのではなかったかもしれませぬ。それは言葉の修練が足りないせいだとい言いかもあつて、何よりも言葉自体が陳腐化しているということでは

注8 ビビッドな生き生きとした。

注9 陳腐化にありふれて価値のないものになること。

政治家やタレントが言ったことは信用できないから、他のエビデンスがほしいと思っても、他のエビデンスだって、本当に信用できるかどうかからなくなっています。これは言葉や情報の性質ですが、それらがだんだん人間の身体性から離れ、自由に一人歩きを始めたということです。⑨ 私はゴリラとの付き合いから、言葉を持たない会話が、いかに互いの信頼を紡ぐものであるかということを感じました。言葉によって情報を得て、理解が進むかもしれませんが、信頼は置き去りにされています。物事を理解することが、物事を信頼することに、常につながるとは限らないということです。

(山極寿一・小原克博『人類の起源、宗教の誕生』による)

問一 — 線部①、②について、なぜ「ゴリラやチンパンジー」と「人間」とではこのような違いが生じるのでしょうか。その原因となる両者の特徴を対比する形で、七十字以上八十字以内で答えなさい。(句読点・記号も一字に数えます)。

問二 — 線部③「想像を共有することによって、人間は活動範囲を広げ、恐らく人間の社会的なつながりに新しい変化をもたらした」とありますが、このような変化をもたらした要因として、もっとも適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 人間が食物の分散している森の外に出たために、常に飢えに苦しむようになったこと。
- イ 人間が熱帯雨林を離れた後、集団としてまとまることなくばらばらに暮らすようになったこと。
- ウ 人間が行動範囲を広げたために、仲間が持ち帰った食料を食べざるを得なくなったこと。
- エ 人間がゴリラやチンパンジーと違った場所で暮らすようになり、お互いの結束を強めたこと。

問三 — 線部④「なぜそんな状態で生まれてくるようになったのか」とありますが、その理由を説明した次の文章の A E にあてはまる言葉を本文から抜き出して答えなさい。なお解答に際して、空欄内の字数指定に従うこと(句読点・記号も一字に数えます)。

人間は A (一字) の大きさの割に B (二字) が狭いため、出産時の危険を避けるために、赤ちゃんが胎内で十分に成育するのを待たずに出産し、 C (十六字) という方法を採用するようになった。そのため人間の赤ちゃんは、その方法に必要な D (二字) をまかなうために E (五字) をたくわえて、ひ弱な状態で生まれてくることとなった。

問四 X は、次のア～エの四つの文から構成されています。四つの文を正しい順番に並べかえ、その順番を、解答用紙の形式に合わせて記号で答えなさい。

- ア つまり、離乳食を食べさせる必要があるわけですが、農耕牧畜以前の長い長い狩猟採集の時代、子供用にわざわざ柔らかいフルーツなどを採ってくるのは、大変なコストだったはずだ。
- イ しかし、今では、人間の子供は乳歯のまま離乳しますから、大人と同じものが基本的には食べられません。
- ウ また、ゴリラもチンパンジーも離乳する頃には永久歯が生えており、大人と同じものを食べることができるようになっています。
- エ ところが、人間の子供に永久歯が生えるのは六歳頃ですから、もともと人間はその頃まで授乳していたと考えられます。

問五 — 線部⑤「人間の脳は、恐らく道具を使い始めてから大きくなりました」とありますが、これはなぜですか。その理由としてもっとも適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 道具を製作する、使用する、という行為を通して、人間はより手先を使うようになり、それによって脳が刺激されたから。
- イ 道具の登場は、より便利な道具を発明しようという人間の欲求を加速させ、人間の創造力を進ませたから。
- ウ 道具の発明によって生産性が上がり、食物が行きわたったことで、人間は十分な栄養を取ることにできるようになったから。
- エ 道具が実地的な使用目的以外にもさまざまな意味を持つようになり、人間がより高度なやり取りを行うようになったから。

問六 — 線部⑥「人間は時間と空間というものを、言葉によって自由自在に操ることができるようになった」とありますが、なぜ「人間」は「時間と空間」を「自由自在に操ることができるようになった」のですか。その理由としてもっとも適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 人間は、言葉を操ることによって自然界の法則を変化させる力を手に入れ、自然や動物を支配するようになったから。
- イ 人間は、今見ていない他の場所での出来事や、過去や未来の事象について、言葉で表したものを真実とみなすようになったから。
- ウ 人間は、言葉によって神と契約を結び、神から世界を与えられたことで、神の言葉を真実だと考えるようになったから。
- エ 人間は、言葉で世界の事象を把握するというやり方を応用して科学を発達させ、時間や空間を自在に操る力を得たから。

問七 — 線部⑦「ここから人間独自の世界観や環境観が始まります」とありますが、その説明としてもっとも適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア ささまざまな動物たちと対等な関係で共存し、自然と一体となって暮らしていた人間が、言葉を使うようになって、神の存在や神との契約を信じるようになった結果、自然を人間の従属物であるとみなして人間のために利用するようになった、ということ。
- イ いろいろな生物と感応して、自然の一部として生活していた人間が、言葉を使うようになってから、言葉を持たない他の生物たちを自分たちより下等なものであるとみなすようになり、自然を人間たちの都合のよいように改変するようになった、ということ。
- ウ いろいろな生物たちとある種の会話をしながら自然に溶けこんで暮らしていた人間が、言葉を使うようになって、それまでのように自然界の生物たちと会話する力を失ったことで、それらを恐れる気持ちが強まり自然を押しつけて支配するという発想になった、ということ。
- エ ささまざまな動物たちの行動や意志を直観的に把握して、自然と対等な立場で共存して生活していた人間が、言葉を使うようになってから、神という絶対的な信仰の対象を見出し、その神が作った自然を敬い保護しようという考えにいたった、ということ。

問八 — 線部⑧「言葉というものはそもそもすごく安っぽいもので、だから、本当は信用できないコミュニケーションなのではないか」とありますが、これはなぜですか。その理由としてもっとも適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 言葉を正確に用いて誤解なく他人に物事を伝えられる人は少ないから。
- イ 言葉を用いて物事を正確に伝えることはできても思いは伝えられないから。
- ウ 言葉は物事の要素の一部を取り出して伝えるものに過ぎないから。
- エ 言葉は情報量の多さという点で映像には及ばないから。

問九 — 線部⑨「私はゴリラとの付き合いから、言葉を持たない会話が、いかに互いの信頼を紡ぐものであるかということを感じました」とありますが、これはなぜですか。その理由としてもっとも適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 言葉による人間同士のコミュニケーションでは相手の言葉にだまされる恐れがあるが、言葉を用いないゴリラとの付き合いでは相手にだまされる心配がないため、安心して付き合うことができるから。
- イ ゴリラとの言葉を持たない会話は、身体的感応により一体感を感じる、という人間が言葉を持つ前に行っていたコミュニケーションそのものであり、もともと人間が持っている感覚にもっとも適した方法であるから。
- ウ 人間同士で行われる言葉を用いたコミュニケーションと変わらないくらい、ゴリラとの身体を用いたコミュニケーションは信頼関係を築くのには有効であるため、この二つの方法に優劣は存在しないから。
- エ 人間は言葉を獲得して以来、言葉を用いたコミュニケーションを重視してきたが、大事なものは言葉ではなく心であり、たとえゴリラとであっても、相手を信頼する心があれば、十分に信頼関係を築くことができるから。

(以下余白)

# 国語解答用紙

受験番号

氏名

↓ここにシールをはってください↓

一

⑨	⑤	①
⑩	⑥	②
うき	⑦	③
⑧	④	

三

問一

問二

問三

問四

問五

問六 朱里

まひろ

こと

こと

三

問七

問八

問九

問一

70

30

40

80

問二

問三 A

B

C

D

E

問四 ↓ ↓ ↓

問五

問六

問七

問八

問九

# 訂正

解答用紙

二問六

(誤) 朱里

(正) 朱理